《清経》試解

――げにも心は清経が仏果を得しこそ有難けれ――

飯塚　恵理人

一　はじめに

《清経》は、武人である清経（シテ）が入水し、その妻（シテツレ）の前に幽霊として現れて自らが自殺した原因が宇佐八幡の神託であることを語り、そして一曲の最後には「仏果を得しこそ有難けれ」と入水の際の最期の十念によって成仏したことが示されるという筋になっている。《清経》の主題について、横道萬里雄氏[1]は、

死を共にと愛し合っていた夫婦が、戦いの非情さゆえふたたび逢えなくなるということ。夫が無益な抗戦からのがれて自殺するにはそれだけの理由があり、夫の心を理解しながらも恨まずにはいられない妻にも理由があるという点に、筋を展開する手掛かりを置いている。

とする。中村格氏[1]は、

「花鳥風月に作り寄せ」ることを条件とした新しい修羅能の素材として、世阿弥は、まず、この八坂系清経説話に着目したのであろう。しかし世阿弥はそのままを劇作化したのではない。これを愛別離苦・怨憎会苦の観点から捉え直し、一門の運命に見切りをつけ、無益な抗戦から逃れて自殺する夫と、夫を愛するが故にこそ、その夫の行為を恨まずにはおれぬ妻との葛藤という形で再構成して筋を展開させ、そこに戦いというものの非情さを彫りの深いタッチで描きあげたのである。本曲が他の修羅ものにみられぬ人間的な苦悩、なかんずく愛欲の妄執を切実に訴える所以がそこに見出せるであろう。

と言われる。伊藤正義氏[3]は、

黒髪が象徴する闘怨の情は、《清経》の一つの眼目で、生死を共に誓い合いながら自ら命を絶った清経を、妻は愛の違約のゆえに容認し得ない。一方清経は、愛の誓いも、平家一門が滅びに到る運命に抗し切れぬことを察して自ら死を選ぶ。そんな清経夫婦の、あるいはもっと広い意味で男女の心情のあり方の違いがテーマになっているといえよう。

と言われる。堂本正樹氏[4]は、キリ前の「言ふならく」の和歌の理解に関係して、

地獄もこの世も同じなのだ。第一清経は『最後の十念乱れぬ』行為のために、仏教教理上の原則では、すでに救われているのだ。救われているのに妻の夢の中に帰って来る霊。これは何であろうか。

と言われる。堂本氏は清経の霊が「教理上ではすでに救われている」にもかかわらず、妻の前に出現することに疑問をもたれている。相良享氏[5]は、

『清経』の主題は、清経の入水しないではおられなかった清い心が、いたし方のないことと妻に悲しく「認知」されることにあった。この曲には亡霊を弔う僧も登場しない。妻も夫を弔っていない。ただ、欣求浄土の彼の心が、妻の理解を得て、妻が恨みを晴らすことによって、清経の霊は成仏する。妻の悲しい「認知」によって、清経の純粋な求道の心は成仏にまで昇華するのである。

と言われる。相良氏の特徴は、妻が恨みを捨てることによって清経の霊が成仏すると言われる点にある。これに対して西村聡氏は、清経の成仏の主因を妻の前に幽霊として現れた清経の心情のあり方に求められる。西村氏[6]は、

妻の夢に現れ、「いかにいにしへ人」と呼び掛けて以来、清経は妻の追求に誠実に、ときに独善を交えて、釈明を重ねた。それは妻に対する謝罪より、自らの心の整理を目的として行われた。「留まらぬは心尽くしよ」と慨嘆して入水した清経は、妻に応対する過程を経て、「留まらぬ」心尽くしを留め、「心は清経（清らか）」になったことが、成仏の主因であると考えられる。

とされる。そして「成仏した清経は、もはや亡霊としてさえ、夢に言葉を交わすことなく、このたびの再会は妻の喪失感をむしろ強めたであろう。」と言われる。

《清経》の魅力が、入水する以外に道を求め得なかった夫と、その夫を愛するが故にその入水を恨まざるを得ない妻との心理的葛藤を美しく舞台化した点にあることは諸説一致している。しかしながら、この曲の理解を難しくしている事は、清経が念仏をして入水しており、すでに成仏しているはずであるのに、「幽霊」という形で妻の前に現れる理由が従来の説でなかなか説明できない点にある。各氏の説かれる《清経》主題と清経の成仏の理由はいずれも少しづつ異なる。

本稿では、清経の妻の「恨み」と、清経が妻の「恨み」を晴らす「必要」について考えたい。そしてそこから清経が「仏果」を得たことと、その妻にとっての意味を考えたい。

二　平家物語における清経の妻像　――恨む女――

清経の霊は粟津三郎が妻に渡した清経の遺髪を、妻が宇佐に返した事をきっかけにして現れる。天野文雄氏は、この形見の遺髪送りが、平家物語では清経の生前に清経からの音信が絶えた事を恨んで妻が行っていることに注目される。そして、この死後の形見送りが、平家物語の清経生前の形見送りを前提とした、二度目の形見送りであることを述べておられる。天野氏[7]は、

> 清経が登場して夢中で妻と交わす言葉に、「憂さにぞ返す本の社にと、さしも送りし黒髪の、飽かずは留むべき形見ぞかし」とあるが、これは上掛りの文句で、下掛りでは傍線部が「二度送る黒髪の」となっているからである。（中略）下掛りの文句に即して《清経》の趣向を考えてみると、清経はかつて形見として髪を妻に送っていて、これは二度目ということになる。（中略）『平家』の遺髪譚をふまえ、それと同様の趣向を設定して、遺髪をめぐるやりとり（世の無常を説いて妻を諭す趣向は本曲の主題に直結）を効果あらしめようとしたのが世阿弥の意図だったと考えてよいと思うのである。

と言われている。本文に「二度送る黒髪」とあり、一度目の形見送りが《清経》に書かれていない以上、この天野氏の指

摘は肯なわれる。『平家物語』延慶本[8]の妻が形見を宇佐に返す部分を引用すると、

小松内大臣ノ三男左中将清経ハ、最心苦シク被思ケル人ヲ置テ、都ヲ出給ケル時、西海ノ浪ニ沸ナバ、再会其期ヲ不知。何ナル人ニミヘ給トモ、思出テハ念仏申テ、後世訪タベ」トテ、髪ヲ切テ形見ニ遣タリケルガ、中将都ヲ出給テ後ハ、風ノ便ノ音信モ無リケレバ、女恨テ彼ノ形見ニ一首ヲソヘテゾ遣シケル。

ミルタビニ心ヅクシノ神ナレバ宇佐ニゾカヘスモトノ社ヘ

実ニヤサシクアワレナリシ事也。

となる。妻は清経が音信不通となったことを恨んだ。形見を歌とともに返したと言うことは、妻の側から清経に別れを告げたと考えても差し支えない。また、それと同時に清経には念仏をして弔ってくれる人物も無くしたと言ってよい。この部分が清経入水の前に置かれるのは、延慶本の清経自殺の原因が、主に「何へ行バ。可通達ニカハ」と言う源氏に追いつめられた状況にあると書かれているにしても、清経が世に「思ひ残す」事の無くなった理由として書かれていると読むことが出来る。妻の行為は、清経の死の間接的な原因となっていると言えるのである。しかしながら、この妻は清経が音信のないことを「恨んで」いたのであり、その意味でそれ以前清経との間に愛情が通っていたとして書かれていると言ってよい。この妻の性格について、中村氏[9]は

原典説話における清経北の方の恋慕の情が、せいぜい、遺髪を心づくしの種として送り返すとか（八坂系諸本・延慶本）、相具して下らんとしたのを親に留められ、夫との約束を三年もの間持ち続ける（源平盛衰記）といった具合の、運命に従順な、「やさしくあはれなりし」趣であるのに較べて実に対照的な強さを持つ。世阿弥の能には、愛欲・邪淫の罪をもおそれず、恋い焦がれ抜き（たとえば「班女」「松風」のシテのように）、恨み通す（たとえば「葵上」「砧」のシテのように）熾烈な生の追求者が登場するが、『清経』ツレもその系譜に位置づけてよい。

と「熾烈な生の追求者」として造形されているとされる。中村氏は「愛の完成を求める執心が深ければ深いほど、激しければ激しいほど『死』の壁によって隔てられた恋情の嘆きは深く、ツレの悲劇性を一層きわだたせる効果をもたらしてい

る点にも注目しておきたい。」と言われる。

中村氏は、原典である『平家物語』の清経妻像と能における清経妻の相違点に注目されているのだが、ではこの二つの話における共通点は何であろうか。私は、この二つの話の共通点を、清経の妻が清経を「恨む」点にあると思う。「見る度に」の歌は、『平家物語』においては、清経が妻に対して音信不通であり、妻がそれを恨んだと言う話になっている。『平家物語』では、妻が清経の心変わりを疑っているようにも読める。一方、能では、「生きて再び」逢うという「約束」が話の前提とされており、その約束を清経が「入水」と言う形で一方的に破棄したことを恨む、すなわち清経の違約を恨むと言う形になる。しかしながら、原典も能も、妻が清経を「恨み」、形見を「憂さ」故に「宇佐」に返す点は共通しており、その意味で、清経の妻は現世へ執着する深い「罪」を持つ女性として造型されている。

三　「淡津三郎」と言う名前

清経の遺髪を持って九州から都に戻る使者の名前を「淡津三郎」とすることは、上掛り系・下掛り系の諸伝本全てに共通している。《清経》には世阿弥自筆能本が現存しないので確定は出来ないが、世阿弥の原作で既にこの「淡津三郎」という名前が用いられていたと考えて良いであろう。そしてこの名前が「逢わず候」と、清経とその妻がついに此の世では再会することなく終わったことを暗示する名前になっていることは象徴的である。世阿弥はシテツレなどの主人公を引き立たせる役の人物については、このような曲の内容と関係する名前をつける場合があった。例えば《砧》の夕霧が挙げられる。夕霧は田口和夫氏[10]が「妻を悲劇の死に追いやったのは従って、夕霧の『この秋もおん下りあるまじき』という言葉であった。」と言われるように妻の絶望による死の直接の原因となる人物である。そして、田口氏は「おそらくワキの愛妾であった夕霧の、これはささやかな作為であったと考えたい。」と夕霧のこの言葉に「作為」があったとされている。ただこの「霧」と言う言葉自体が、『源氏物語』[11]若紫に「立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草の戸ざしにさはりしもせじ」とあるように、和歌においてみずからと相手の間に立って二人の仲を隔てるものとしての機能を持つ言葉であることは重要であろう。夫が妻のもとに送る人物の名前が「夕霧」である時点で、この夫婦は夕霧によって隔てられることが、能の享受者には伝わったであろう。このような人物の呼称は世阿弥以降にも見ることが出来る。例えば《熊野》において、

熊野に病気の母の手紙を届ける従者は「朝顔」である。朝顔を人の世の無常にたとえた歌としては、『順集』[12]一二〇番の、「よのなかをなににたとへん夕露もまたできえぬるあさがほの花」があげられる。この従者の「朝顔」の名も母の命が短いことを象徴する名前となっていると言える。これと同様に夫の遺髪を届けるこの人物が「逢わず候」であった時点で、この曲が夫婦の別れと夫婦が再会出来なかった恨みを軸に展開することを能の享受者は知ることとなる。

この淡津三郎が清経の死の原因について語る部分は、上掛り系と下掛り系で異文がある。まず、上掛り系では、[13]

さても頼み奉り候ふ清経は、過ぎにし筑紫の戦にも打ち負け給ひ、都へはとても帰らぬ道芝の、雑兵の手に掛からんよりはと思しめしけるか、豊後の国柳が浦の沖にして、更け行く月の夜舟より、身を投げ空しくなり給ひて候。

と、清経が「雑兵」の手に掛かって死ぬ[14]よりは入水を選んだとなっている。この死の理由は武人としての名前を惜しむと言う意図が感じられる。一方下掛り系では傍線部が「つひに身の成りゆくべき事をおぼしめし定められけるか」と言う形となる。こちらは武人としてのプライドには触れられず、清経が自分の運命を知って自ら命を断つ道を選んだと言う形となる。

淡津三郎は妻に対し、「面目もなきおん使ひ」に来たと言う。それは「遁世」だろうかと妻はいぶかる。夫の遁世により捨てられる妻の話は、『西行物語』[15]にもある。西行は妻に向かい「この世一つにあらず、後生には必ず一つ蓮の身となり、ともに無生忍を証すべし。」と言うが妻は泣くのみで返事をしなかったと言うものである。妻の質問に「遁世」を入れたのは、それが夫の側からの妻との一方的な別れ、しかも取り返しのつかない別れを意味するものであるからだろう。

淡津三郎は妻に対して夫が入水して亡くなったことを告げる。この時の妻の言葉は、

恨めしやせめては討たれもしはまた、病の床の露とも消えなば、すこしの恨みも晴るべきに、われと身を投げ給ふこと、偽りなりける遺言かな、げに恨みてもそのかひの、亡き世となるこそ悲しけれ

となる。清経は「生きて帰る」努力をすることを妻に約束していたことが、この曲の前提となっている。そして、それが

この妻の「偽りなりける豫言かな」という言葉から知られることになる。「少しの恨みも晴るべきに」は五流の現行曲では「力なしとも思ふべきに」で共通であるが、いずれにせよこの短い妻の言葉に複数回「恨み」が述べられることは注意すべきことであろう。そしてこの『恨み』は清経と二度と「逢わず」になったこと、そしてそれが入水という清経の意志による行為であることにより、一層強められることとなる。「面目もなき使い」とは、「夫が妻を捨て」「逢わず候」ことを告げる使いだった。妻は、清経の形見を見る。そして、

これは中将殿の黒髪かや、見れば目も昏れ心消え、なほも思ひの増さるぞや、見るたびに、心づくしの髪なれば、憂さにぞ返す本の社にと

と「思ひの増さる」気持ちを述べる。この『思ひ』は現世の幸福への執着と考えてよいだろう。妻は形見を返すが、これはやはり「見る度に心尽くし」であって悲しい思い出をよみがえらせるので、その「憂さ」の余りに返しているのである。この意味で、妻は清経の死を納得しておらず、そうである以上妻の気持ちは極楽を願う方向にはないと言える。

四　聖人に夢なし

この妻の夢枕に、清経が立つ。この清経の心情が

聖人に夢なし誰あつて現と見る、眼裏に塵あつて三界窄く、心頭無事にして一床寛し、げにや憂しと見し世も夢、辛しと思ふも幻の、いづれ跡ある雲水の、行くも帰るも閻浮の故郷に、たどる心のはかなさよ。

と述べられている。「聖人に夢なし」は本当に悟った者は夢を見ないという意味である。また、夢の内容の疑わしさに関しても使用されることがある。その例は、『太平記』[13]巻二十五の「自伊勢進宝剣事付黄梁夢事」の、安徳天皇が壇ノ浦で沈めた宝剣が出てきたと伊勢国より進奏された時、足利直義が見た夢に対して、皆が「天下静謐」の夢想だとしたことに関する記事にある。この時、坊城大納言経顕が院に対して、宝剣が本物ではあり得ず、また直義の夢が信じがたいと述べ

た言葉として、

若我君ノ聖徳ニ感ジテ出現セリト申サバ、其ヨリモ先天下ノ静謐コソ有ベク候へ。若又直義カ夢ヲ以テ、可有御信用ニテ候ハヾ、世間ニ無定相事ヲバ夢幻ト申候ハズヤ。サレバ聖人ニ無夢トハ、是ヲ以テ申ニテ候。

とある。ここで坊城経顕は、直義が聖人でないとして、この言葉を使用している。世阿弥時代には夢を見る人への疑わしさ、そして夢の内容の疑わしさを言う上で、かなり流布した言葉だったのではなかろうか。この言葉によれば、夢を見る妻は「聖人」ではありえない。そして妻が見た内容も「あてに出来ない」と周囲に思われる意を含むだろう。しかしながら、妻が清経の姿を見るのは「夢ならで」はかなわないのである。

「眼裏に塵あつて三界窄く、心頭無事にして一床寛し」は『夢窓国師語録　巻下之一』[17]の「偈頌」の「山居韻十首　贈古航和尚」の八首目に

青山幾度変黄山　浮世紛紜總不干
眼裏有塵三界窄　心頭無事一床寛

から採られていると考えて良い。この出典は俗世の紛争を離れて山居する心境を詠んだ偈である。この《清経》の本文は偈の前半を省略している。しかし世阿弥はこれを聞く人がこの偈を下敷きにしていることを理解できることを前提としていると考えて良い。とすれば、これを詠じながら清経の霊が現れると言うことは、この夢に現れる清経自身が紛争から離れた澄んだ心境にあると考えて良いであろう。

清経は妻に対して「いかにいにしへ人、清経こそ参りて候へ。」と呼び掛けている。この「いにしへ人」と言う表現は《芦刈》[18]の妻がしばらく音信不通となっている零落した夫に対して述べる表現にも、

いかにいにしへ人、わらはこそこれまで参りて候へ、行く末かけし玉の緒の、結ぶ契りのかひありて、今は世にある様なれば、遥ばる尋ね参りたるに、いづくへ忍ばせ給ふらん、

などとして用いられている。ともに睦まじい夫婦であったものが、現在は別れている状態であるときに使っていると言って良い。妻は、「いにしへ人」として呼ばれたことはとがめない。その関係である事を自らも認める。そして、そのように関係が途絶えた事を恨むのである。

清経と妻は、形見を妻が返した事を清経が恨み、そして清経が入水したことを妻が恨むということで互いに恨みあう関係であると記される。そしてそれは「くねる涙の手枕を、並べてふたりが逢ふ夜なれど、恨むればひとり寝の節ぶしなるぞ悲しき。」と表現される。この詞章によれば、清経と妻が「一人寝」の状態であるのは互いに「恨む」故となる。つまり生死という「世」を隔てることは、この場合夢で「逢ふ夜」の妨げとは意識されていない。二人が「逢う」ためには、二人ともに相手への「恨み」を消滅させる必要があった。

五　恨みを御晴れ候へ

清経は、「いにしへのことども詳しう語つて聞かせ申し候ふべし、恨みをおん晴れ候へ」と言って宇佐八幡の神託について語り始める。清経の目的は妻の「恨み」を晴らすことにあった。そして平家の一門が宇佐八幡に参詣する部分を話しはじめる。しかしながら、この清経の語は、妻の言葉によって遮られる。

ツレ　「かやうに申せばなほも身の、恨みに似たることなれども、さすがにいまだ君ましまし、み代のさかいや一門の、果てをも見ずして徒らに、おん身ひとりを捨てしことは、まことに由なきことならずや。」

シテ　「げにげにこれもおん理さりながら、頼みなき世の徴の告げ、語り申さん聞き給へ。」

妻の清経に対する恨みは入水が「由なき」事であると言う点にあった。そして清経はそれに対し「頼みなき世の徴の告げ」について語る。そしてその中心は、宇佐八幡の「世の中の、憂さには神も　なきものを、何祈るらん、心尽しに」という神詠である。清経は「世の中の憂さには神もなき」という託宣を聞いた。そして平家一門が「仏神三宝も、捨て果て給ふ」状態となり、滅亡する運命であることを理解した。そしてこの託宣は「長門の国へも敵向かふ」という事により、現実化

する方向に進んでいた。清経は入水を決意する。この部分は

ここに清経は、心に籠めて思ふやう、さるにても八幡の、ご託宣あらたに、心魂に残ることわり、まこと正直の、頭に宿り給ふかと、ただひと筋に思ひ取り。シテ　あぢきなや、とても消ゆべき露の身を　地　なほ置き顔に浮き草の、波に誘はれ、舟に漂ひていつまでか、憂き目を水鳥の、沈み果てんと思ひ切り、

と言うものである。清経は「あら思ひ残さずや」と此の世への未練を捨てている。そして

西に傾く月を見れば、いざやわれも連れんと、南無阿弥陀仏弥陀如来、迎へさせ給へと、ただひと声を最期にて、舟よりかつばと落ち汐の、

と阿弥陀如来の来迎を願って念仏して入水するのである。

極楽へ往生することを目的にして投身した説話としては『沙石集』[19]巻第四第八話の「入水シタル上人事」が挙げられる。これは「或山ノ中に、上人アリ。道心フカクシテ、ウキ世ニ心ヲトメズ、急ギ極楽ヘマイラムト思ケレバ、入水ヲシテ、死ト思立テ」、船を用意して同行の僧とともに湖に漕ぎ出たというものである。上人は同行の僧に「臨終ハ一期ノ大事也。」として入水しても「妄念執心モアリテ、命モ惜ク、余念モ交ラバ、往生不定ナレバ」と言って、妄念が生じたら死んだとしても極楽往生はできないから縄を引いて引き揚げて欲しいと頼み「念仏唱テトビ入」った。はたして妄念が起こり、水から上がった。上人はこれを何回も試みては失敗したが、遂に「飛入テ後、縄モヒカズ。サル程ニ、ソラノ中ニ音楽キコヘ、浪ノ上ニ紫雲タナビキテ、目出カリケレバ」と往生した。語り手は「実ニ我執名聞ノ心ニテ、不可往生ス。真実ノ信心ニテコソ、素懐ヲモトゲベケレ。」とこの上人の行為を肯定的に捉えている。清経の入水も、このような極楽往生を意図した入水譚の一つと捉えることも出来るだろう。

また、その人の死を悲しんでいる縁者の前に、極楽に往生した「仏」が、人間の姿で現れる話としては、『大鏡』[20]の伊尹伝に載る藤原義孝の話が参考となる。藤原義孝（後少将）は「年頃きはめたる道心者」であったが、「天延二年甲戌の年、皰瘡おこりたるに煩ひたまひ」て兄（前少将）と同じ日に亡くなった。この義孝の死後、賀縁阿闍梨の夢に義孝が現

れるが、

この後少将は、いと心地よげなるさまにておはしければ、師闍梨、「君はなど心地よげにておはする。母上は、君をこそ、兄君よりはいみじう恋ひきこえたまふめれ」と聞えければ、いとあたはぬさまのけしきにて、

しぐれとは蓮の花ぞ散りまがふなにふるさとに袖濡らすらむ

など、うちよみたまひける。

と言う記事がある。義孝は母親が悲しんでいるというのに対して、自分が「蓮の花」の散る極楽にいるのに、なぜこの世の故郷では悲しむのだろうという和歌を詠んでいることとなる。この記事に続いて、義孝が小野宮実資大臣の夢に現れ、実資が「いかでかくは。いづくにか」と質問したのに対して答えとして「昔ハ契リキ、蓬莱宮ノ裏ノ月ニ　今ハ遊ブ、極楽界ノ中ノ風ニ」と言う記事が載る。『大鏡』は義孝を「極楽に生れたまへるにぞあなる。」とコメントする。この説話では、義孝の成仏は義孝の生前の「道心」によるものとされており、それが夢で縁者に知らされている。縁者がもう一度義孝に再会したいと思うのならば、義孝の住む極楽へ往生しなければならないわけで、義孝はこれら縁者が極楽を願う縁となる人物として書かれていると考えて良い。清経が妻に極楽往生をしたことを語ることもこれと同様、極楽往生の希望を持たせるためであると考えられる。

六　清経の成仏と妻のその後

清経の入水に至る「頼みなき世の儚の告」と「最期の有様」の話は終わった。この時の妻の言葉は「聞くに心も呉織、憂き音に沈む涙の雨の、恨めしかりける契りかな。」と言うものである。「恨めしかった契り」という表現は、清経の妻が、現世における二人の「契り」が結局は断たれる運命であったことを頭では理解したことを示している。清経の物語は妻の「恨み」を晴らすために多少の効果があったと言ってよい。しかしながら、この妻はやはり「憂き音に沈む涙の雨」の中にいるのであって、清経の死を縁としてそのまま自らが極楽往生を目指すと言う方向へは至っていない。清経はその妻に対し

て「言ふならく、奈落も同じ泡沫の、あはれは誰も、変らざりけり。」と言う。この部分の伊藤氏[21]の訳を挙げると「恨み言を言うな、奈落（地獄）もこの世も同じこと、哀れさは人間誰も変りはないのだ。」となる。

清経は妻の恨み事に対して、妻が口をはさんだ時を境に二度まではその理由の釈明を行った。そしてその釈明を妻が頭で納得したことを知ると、それ以上の「恨み」を口にすることを制したのである。そして、この運命が自分だけではなく、平家全体に及んでいることを示す。「西海四海の因果を見せて」という詞章は、清経が妻に、愛別離苦の悲しみが自分達夫婦に個有の物ではなく、六道を輪廻する者に共通の苦しみであることを、示したことになるだろう。

「さて修羅道に遠近の」以降は、清経の霊が実際に修羅道へ堕ちたのかどうかがまず問題となる。それについて言えば、清経は、戦いで討ち死にしたのではないのだから、修羅道に堕ちる要素がない。「これまでなれや、まことは最期の十念乱れぬ」状態で入水したのだからそのことによって「まことは」「仏果」を得ているのである。であれば、「さて修羅道に遠近の」は仏果を得た仏が「いにしへ人」にあえて修羅道の様子を見せ、「西海四海の因果を見せ」、「あはれは誰も変らざ」ることを納得させるための方便であると言える。清経は「修羅道」を妻に見せているのであり、修羅の苦しみの時間が来て修羅に帰るのではない。その点で修羅の苦患を見せる《八島》《経正》などと異なる。仏が衆生に地獄の様子を見せる説話としては、『私聚百因縁集』[22]巻二天竺之篇の「因果長者事」が挙げられる。その老僧は、老いて後発心し出家したため、老いているのに弟子の末座であった。このため皆がこの老僧を使うので、老僧はその身体の苦痛に堪えず山から投身する。それを仏が受け取って目蓮尊者に預けて地獄の有り様を見せる。目蓮が「実思（ニハン）此身（ヲ）者捨（テ）、此身（ヲ）可（ヒ）思（フ）」と、本当に自分を思うならば身体を思う心を捨て、身体の苦痛を顧みず仏に仕えるべきだと言うと、この老僧は悟って「忽断（ニツト）三界煩悩（ノヲ）」と言う。この老僧も「因果」を見る事によって悟ったと書かれているのであり、「因果を見せる」ことは仏がその人物を悟らせる手段として認識されていたと考えて良いだろう。

清経の妻は清経の死を納得できず恨んでおり、この恨みが消えない限り成仏し得ない。清経は「仏」として妻を「引接」するために妻の夢に現れ、妻の「恨み」を棄てさせるべく、夢枕で自分の運命を語る。無論、この妻の心は清経の一度の訪れで納得し、極楽往生を願う方向には向かない。しかしながら、この話と同様、夫が「遁世」によって妻を捨てた場合、その妻も「遁世」したという説話のパターンが存在する。例えば前述の『西行物語』[23]の西行の妻も、西行の出家時には納得していなかったが、その後「やがて母御前も様変へ」と、西行との間の娘を残して出家したと書かれる。また、『撰集

抄』[24]巻九第一〇話「於長谷寺逢敬人」では西行が出家した妻と再会した記事を載せる。妻は西行に対し「我をさけて、いかなる人にもなれ給はゞ、よしなき恨も侍りなまし。是は実の道におもむき給ぬれば、露ばかりのうらみ侍らず。」と言う。西行はそれに対し、「さまがへける事のうれしく、恨を残さざりけん事のよろこばしさに、そゞろに泪をながし侍りき。」と妻が「恨み」を残さなかった事を喜んでいる。

この清経の入水を、妻を捨てて出家する発心譚の延長において理解するのならば、やがては清経の妻も恨みを晴らして清経の住む極楽へ往生することを願い、死後には共に同じ蓮華に座す運命にあるのだと考えるのが自然であろうと思う。『平家物語』覚一本の滝頂巻「六道之沙汰」[25]の建礼門院の回想に清経の入水は、「心うき事のはじめにてさぶらひし」と書かれる。『平家物語』諸伝本においても、清経は念仏を唱えて入水したとあるから、やはり極楽往生を遂げた人物として描かれていると考えるのが自然である。仏となったとしても、この世に住む人間の立場から見れば平家一門の「心うき事のはじめ」となった人物を題材に、世阿弥は「世の無常を真に悟った人物」という新たな人物像を構築した。そしてその人物が仏となってさらに縁者である妻を救いに来ると言う筋を作った。この点に世阿弥が《清経》を「軍体」の能として作成した際の素材処理の方法の新しさがあり、これによって世阿弥は、もし修羅能というジャンルを武士が修羅道に堕ちて苦しむ様を見せ場とする曲とするならば、それだけには当てはまらない新しい人物像を作りだすのに成功していると言えるように思う。

注

(1)『謡曲集　上』　横道萬里雄　表章校注　日本古典文学大系40　岩波書店　昭和三五年一二月発行　二四九頁　本稿の《清経》本文の引用は、特に断らない限り全て同書による。引用文毎に頁を付する事はしなかった。

(2)『「清経」鑑賞―本説と劇的性格に触れて―』　中村格　「日本文学」　日本文学協会　第二八巻一一号　昭和四九年一一月　『室町能楽論考』所収　中村格　わんや書店　平成六年四月発行　二七二頁

(3)『謡曲集　中』　伊藤正義校注　新潮日本古典集成（第七三回）　新潮社　昭和六一年三月発行　四二九頁中段

(4)『世阿弥』　堂本正樹　劇書房　昭和六一年四月発行　五六八頁

(5)『世阿弥の宇宙』　相良亨　ぺりかん社　平成二年五月発行　一五四頁

(6)『能の主題と役造型』　西村聡著　三弥井書店　平成一一年四月発行　一七四頁

(7)「能と説話―世阿弥の場合―」天野文雄『説話の講座　第六巻　説話とその周縁―物語・芸能―』所収　勉誠社　平成五年三月発行　二七八頁
(8)『延慶本平家物語　本文篇上・下』北原保雄　小川栄一編　勉誠社　平成二年六月発行　下冊　一三六―一三七頁
(9)同注2　二七四頁
(10)「(砧)の時間(秋・三年)」田口和夫「鎖仙」364「研究十二月往来」90　昭和六三年一一月発行『能・狂言研究―中世文芸論考―』所収　田口和夫　三弥井書店　平成九年五月発行　一九四頁
(11)『源氏物語　一』山岸徳平校注　日本古典文学大系14　岩波書店　昭和三三年一月発行　二一九頁
(12)「順集」『新編　国歌大観　第三巻　私家集編Ⅰ　歌集』所収「新編国歌大観」編集委員会　昭和六〇年五月発行　一〇〇頁
(13)同注1　二五〇頁
(14)『謡曲集　上』野上豊一郎解説　田中允校注　日本古典全書　朝日新聞社　昭和二四年一一月発行　一六五頁
(15)『西行物語』桑原博史全訳注　講談社学術文庫　講談社　昭和五六年四月発行　六八頁
(16)『太平記　二』後藤丹治　釜田喜三郎校注　日本古典文学大系35　岩波書店　昭和三六年六月発行　四六二頁
(17)『夢窓国師語録巻下之一』『大正新脩大蔵経　第八十巻続諸宗部一』所収　大正新脩大蔵経刊行会　昭和六年五月発行　四七九頁上段
(18)同注1　三六四頁
(19)『沙石集』渡辺綱也校注　日本古典文学大系85　岩波書店　昭和四一年五月発行　一九二―一九三頁
(20)『大鏡』橘健二校注・訳　日本古典文学全集20　小学館　昭和四九年一二月発行　一九〇―一九二頁
(21)同注3　二五頁頭注一六
(22)『私聚百因縁集巻三天竺之篇』『大日本仏教全書　第九二巻　纂集部二』所収　財団法人鈴木学術財団編集・刊行　講談社発売　昭和四七年一一月発行　一四二頁
(23)同注15　二一二頁
(24)『撰集抄　下』安田孝子　梅野きみ子　野崎典子　河野啓子　森瀬代士枝校注　現代思潮社　昭和六二年一二月発行　二七三頁
(25)『平家物語　下』高木市之助　小沢正夫　渥美かをる　金田一春彦校注　日本古典文学大系33　昭和三五年一一月発行　四三七頁

付記

「文学研究論集」第一号に永田康昭先生が『「敦盛」のワキについて』という論文を書かれています。当時大学院一年生だった私は大変啓発された覚えがあります。永田先生の御冥福をお祈りしますとともに、「文学」分野にも永田先生の衣鉢を嗣いで能の研究を行う人が出て下さればと思います。

本稿は平成一一年度椙山女学園大学学園研究費助成（B）による成果の一部となります。